
ハジマリは夜の舞台で

柊 深夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハジマリは夜の舞台で

【Nコード】

N9614V

【作者名】

柊 深夜

【あらすじ】

前の世界で死んだ主人公がぬらりひよんの孫の世界で転生！羽衣狐に拾われて妖怪として奮闘中？

元・奴良組 転生者の妖怪生活奮闘記。

零 主人公設定（前書き）

初めまして！終深夜です。初めての投稿で駄文ですが、どうぞよろしく願います？

まずは設定からいきます。

零 主人公設定

篠原 ? 葉 (18)

?? ? ? ←

不知火 ? 華紅夜 (12)

* 篠原^{しのはら} ? 葉^{よう} (18)

主人公、転生前。両親をある事がきっかけで亡くす。それを目の前で見てしまったせいか、かなり冷めた性格に。根は優しいので数少ない友達には好かれていた。車に引かれそうになった子供を庇って死ぬ。一人称はボク。

* 不知火^{しりぬい} ? 華紅夜^{かぐや} (12)

主人公、転生後。リクオと同年。捨て子だったところを羽衣狐の気まぐれで拾われる。不知火というのは偽名。一応学校に通っている為。羽衣狐、奴良組の戦いが終わったあとは、奴良組に引き取られる。半妖。

普段は太ももまである黒髪を一つの三つ編みで結っており、伊達眼鏡をかけている。

零 主人公設定（後書き）

短くてすいませんm（――）m細かい部分、主人公の妖怪設定などは本編で書いていきます。
次回から本編に入ります。

巻 転生（前書き）

短いです。

壱 転生

「―――夜じゃ…。」

声がする。

今、ボクは息を確かにしている…。

「華紅夜。今日からお前は妾の義娘じゃ…。」

華、紅夜……？ボクの名前は、葉じゃ、なかったの？

いや、よくよく考えてみればボクがこうして息をしている事自体おかしいんだ。

ボクは死んだはず。トラックに引かれたんだ。

ボクには家族がないから、安心して死ねると思ったのに…どうして？

ゆっくりと目を開いてみる。

闇のような少女だった。そう、まさしく闇。

漆黒の黒髪、真っ白な肌。そして炭で塗り潰したように黒い服。思わずボクはその少女に見惚れてしまった。しかし、直ぐに我に戻る。

この少女は誰だ？

早速聞いてみることにする。

「……だれ？」

少女は何がおかしいのかクスクス笑う。

「妾は羽衣狐。お前を拾ったのじゃ。どうもその不思議な髪に惹かれてのう……。」

そしてまたクスクス笑う。

変わった名前だな……。というより、不思議？ボクの髪は普通に黒だった気がするんだが……。

ボクは自分の髪を手にとって見てみる。

その瞬間、ボクは固まった。ボクの手に乗るその髪はサラサラとした銀髪。しかもボクの手は小学生位の小さな手だった。

少女…羽衣狐はボクの驚いた顔がおかしかったのかニヤリとする。

「どうしたのだ？そんな妖を見たような顔をして。まあ妖の妾が言うのもおかしいがな。」

「妖…？」

聞き返したボクを首を傾げてみる羽衣狐。

「なんじゃ？お前も妖怪じゃろ？もしかして知らなかったのか？」

妖怪？あの鬼みたいなやつのこと？

「変わった奴じやのう。にしても本当に美しい…。」

ボクの髪を撫でながら言う羽衣狐。

「羽衣狐、さんは妖怪、なの？」

「妾を知らんのかえ？妾は…羽衣狐はこの京の妖怪の主じゃ。先刻も言っただろう？お前は今日から妾の義娘じゃ。宜しくのう、華紅夜。」

いやいや、ボクの頭がついていかない。しかもよく見ればこの人……

「（『ぬらりひよんの孫』の羽衣狐……）」

どうやらボクは俗に言う転生をしてしまったようだ。

貳 笑顔（前書き）

主人公の能力が載っています。

式 笑顔

ボクが転生して、羽衣狐を母様と呼ぶようになって一年が経った。時が経つのは早いものだ、と起きたばかりでハッキリしない頭で考える。

この一年で分かったのが幾つかある。

まず、ぬらりひよんの孫の世界に転生したこと。ボク自体は漫画に興味なかったんだけど、前の世界での友達に付き合わされてたから覚えてる。

二つ目は、ボクが妖怪だということ。長い間生きていた母様にも分からないっていう妖怪何だって。妖怪の時は銀髪に金色の目。何だか猫みたいな狐みtainな獣耳が出てる。…本当に母様と血、繋がってないのかな？因みに母様が言うにはボクは半妖なので、人間になる事も出来る。まあ、黒髪と黒目になるだけだけど。

三つ目はボクの妖怪の能力。妖怪の種類が分からない分、何の能力が分からないんだ。母様と暮らすようになって一ヶ月位経った時、違う世界に行ってしまった事がある。何か面白いこと無いかなあ…なんて思ったらいつのまにか。見知らぬ地名ばかりで気付いたんだけど。早く帰りたいって思ったら、気付いた時には自分の部屋にもどってた。他にももう少し寝たいって思ったら一時間位前にタイムスリップしてしまったり、怪我したので治したいって思ったら一瞬で治ったり。他にも色々やってしまった事がある。他に何が出るのか謎だけど、基本的にボクが願った事は叶う事が分かった。

「華紅夜様、朝だよ？」

母様の配下の妖怪、狂骨がボクを呼んだ。一年で仲が良くなった妖怪の一人。

最初は敬語を使われてたんだけど、頼み込んで何とか敬語だけはやめてもらえた。様付けはダメだったけどね。

「うん……。起きてる……。」

ふああ、と欠伸をして目を擦った。

返事を聞いたからか狂骨はパタパタと足音を立てて部屋から遠ざかって行った。

立ち上がって服を身につける。ボクは前の世界で家柄からか着物を好んで着ている。今日も黒の喪服の様な着物を着る。黒を好む母様からの贈り物だった。

「華紅夜様、お早う御座います。」

廊下ですれ違った鬼道丸さんにボクも挨拶を返す。

「あ、鬼道丸さん。お早う…。」

眠そうに言うボクに鬼道丸さんは困った様に少し笑った……気がした。

「華紅夜様、私は羽衣狐様の配下の者です。勿論、貴方にもお使いしているのです。さん付けはおやめ下さい。」

鬼道丸さんは強くて厳しい人だけど、根は優しい人だ。それはボクもわかってる。

「それ言われると、困っちゃうなあ。」

ボクはそう言っただけであまり変えない表情を緩めてハハ、と笑った。鬼道丸さんも少し、眉を八の字にした。

「では。羽衣狐様を待たせていては私が怒られます。」

終始困った顔をする鬼道丸さん。顔に親バカだから、って書いてあるよ。

「うん。じゃあボク行くね。」

鬼道丸さんにそう言って広間に向かった。

????????

「母様、お早う御座います。」

母様は待ち兼ねたように口を尖らせていたが、ボクを見ると微笑んだ。前の世界でも幼い頃に両親を亡くしたボクにとっては嬉しい事だ。自分が起きるのを待っていてくれる人がいる事は。

「おお…。起きたか、華紅夜。待ちくたびれたぞ。」

「ごめんなさい。ちょっと寝坊しちゃって…。」

鬼道丸さんと話していた事は伏せておく。言ったら鬼道丸さんがどうなるか分からない。これは冗談じゃないよ。

それにしてもセーラー服をきた母様は本当に綺麗だと思う。改めてこの世の理不尽さを呪った。

朝食を二人で食べるのはこの一年でついた習慣だった。今日も同じ様に二人で朝食を食べる。

暫く黙って食べていると、母様が言い辛そうに口を開いた。

「……華紅夜……。後で話があるのじゃが……。妾の部屋に来てはくれぬか？」

断る理由もない。ボクは直ぐに頷いた。

母様は有難う、と言ったきり何も話さなくなった。

ボクから話す事も特にないので、今日の朝食はこれで終わった。

「失礼します。」

ボクが扉をノックして部屋にはいる。

母様はニコリと顔に笑みを浮かべていた。いつもの事だったが、その中に哀しさと切なさが含まれている事に、ボクは気付いた。

首を傾げて母様？と聞く。母様のそんな顔を見るのは初めてだったから、不安になったのかもしれない。

そんな事を読み取ってか、母様は今度は本当に寂しそうに笑い、ボクに近づいて来た。母様の手がボクの髪を撫でた。それで少し安心したボクだったけれど、次の母様の言葉にボクは本当に驚いた。

「華紅夜…。お前には、江戸に行つて欲しいのじゃ…。」

江戸…。つまり、東京だろう。

ボクは母様が言っている事が理解できなくて、母様を不安気に見た。

「どついつこと…?」

動揺しているからか、ボクはいつもの敬語が取れてしまう。

「…今はまだ言えぬ。お前に妾の…違つ姿は見せたくない。お前を危険に巻き込みたくないのじゃ。」

漫画では見れない母様の表情。

ボクは気付いたんだ。母様が言っている事。危険って何か。頭に浮かんだのは一つだけだった。

『
鵠
』

奴良組との全面对決だ。この時から…この計画はもう始まっていたんだ……。ボクは母様のこの対決が終わった後の末路を知っている。だからこそ、母様とは離れなくなかった。

でも

「……分かり、ました…。」

母様にその事は言えなかった。母様の表情から見て、これは母様が考えた結果なのだ。ボクが口を出す事じゃないんだ。

だけど、一つだけ言いたかった。すまぬ…と言う母様を今度は真っ直ぐ見つめた。母様も見つめ返してくる。

「母様……。」

母様はボクの言葉にクスリと、最初に会った時と同じ様な笑みを浮かべた。

「当たり前じゃ。」

ボクと母様はクスクスと暫く笑いあっていた。

『絶対に死なないで下さいね。母様の体は、母様だけの体じゃ、ないんですから。』

参 出逢い

「此処が、この世界での東京……。」

誰にも聞こえない位の声で呟く。

やはり、違う世界と言っても風貌はあまり変わらない様だった。

しかし、ボクがこれから住むのは何の因果か浮世絵町。

世の中も狭いもんだ、などと老人くさいことを考えてこれからのボクの住居に向かった。

荷物はあまりない。大きめの旅行カバン一つだけ。先に送ってくれた様だ。

「わ……。」

ボクは思わず声を上げてしまった。

京での家には劣るものの、小学生の自分が一人で住むには十分過ぎる大きさだった。一人で住むには少し淋しいかな、と思いながらも、母様の優しさに嬉しいと思う。

料理は前世でよくしていたので、得意だ。服や布団、歯磨きなど、日常に必要なものも先に母様が送ってくれた様で綺麗に整頓されていた。

「…母様…。」

いつも笑いかけてくれた母様の笑顔が頭に浮かんだ。早くもホームシックか、と自嘲気味に笑う。思えば、帰って来た時に、何も言われないのは久々かもしれない。

自室に向かい、持って来た少ない荷物をしまう。ふと、一つの物が目に入り、手を止める。写真だ。母様や、狂骨、鬼道丸さんや茨木童子さん、しょうけらさん、塵地藏さん、がしゃどくろ…。頼み込んで何とか撮れた一枚の写真。いやはや、茨木童子さんを説得するのは大変だった。

はぁ、と柄にもない大きなため息をつく。

暫く皆には会えないと思うと悲しくなってしまう。本当に柄にもない。

そんな事を考えていると、どこからかガシャアアン、とガラスが割れる様な音がした。

放って置いてもよかったのだが、流石にここは自分の家なので、そちらへ向かう。

「うわ…。」

見ると、見事に窓が割れていた。近くには鞆が落ちている。子供が遊んでいて入ってしまったのだろうか…。

しかし、通って来た道に公園なんてあったかな？それにこんな時代にボールではなく鞆を使うなんて…。

ボクは窓の方向から考えて隣の家からだろう、とその家に向かうべく外へ出た。

????????

「すみませーん。」

隣の家はかなり立派な家で、大きい様だった。聞こえないかもしれないと少し大きめの声を出す。

暫くすると門がギイイイ、と開いた。出て来たのは一人の少年。ボクと同じ年くらいだ。

……ん？待てよ。

この少年、どこかで見た事ある気がする。

「え、ええと……。」

しどろもどろとしている少年の声にボクは我に帰り、鞆を差し出した。

「これ、ボクの家に入って来たんだけど……。」

それをきっかけにしてか、少年が頭を下げた。

「ご、ごめんなさい？ちょっと遊んでたら入っちゃって……。」

「いや、いいんだ。じゃあ、ボクは行くから。」

踵を返し、帰ろうとしたボクの手を少年が掴んだ。
ボクは少し驚いて少年を見る。

「なに？」

「あ、えと…。何もしないのも悪いし…。少し、上がっていきませんか？」

少年はボクの態度を見てか、敬語になって聞いて来た。この後、特に用事はない。

「いや、それはいいんだけど…。そろそろ、手、離してくれないかな。」

ボクが手を見て言うと、少年はご、ごめん！と顔を真っ赤にして慌てながら離れた。

…からかい甲斐があるな、この少年。

「えと、僕、奴良リクオって言います！よ、よろしく。」

……はい？

????????

「そっか、華紅夜ちゃんって言うんだ。」

ボクは成り行きで結局上がる事になった。

奴良リクオ君。

見た事あると思っていたら、まさか主人公さんに会うとは思っていなかった。

彼：リクオ君は先程より幾分か緊張感がなくなり、ボクに笑いかけていた。下の名前で呼んで、と言ったのも敬語はやめてくれ、といったのもボク。だからかもしれない。

「あ、うん。リクオ君、ここ、何か変な感じがするんだけど。」

ボクは言いたい事はハッキリ言うタイプである。だから言った。うん、この変な感じが何かはわかるんだけどね。多分、妖怪。ボクは

他の妖怪より妖気を感じるのが苦手だから多分としか言えないけど…。

ギクツとしているリクオ君に言うかわまいかを迷ったけれど結局言う事にした。

「ここ、妖怪いない？」

ビクウウウ、と分かりやすい反応をするリクオ君にボクは少し吹き出してしまった。

「リクオ君、分かりやす過ぎ。大丈夫だよ、誰にも言わない。」

ボクは立ち上がり、帰る準備をして障子の前に立つ。そしてもう一度振り返ると固まっているリクオ君に言った。

「———また、次あった時は宜しく。」

それだけ言うと、ボクはリクオ君の家を出た。

???????

不思議な子。それが第一印象だった。

無表情だと思えば僕を見て吹き出したり、いきなり同い年とは思えない大人びた表情をして。

僕が暫く呆然として華紅夜ちゃんの出で行った障子を見つめていると、向こうで覗いていた雪女が飛び出して来た。

「リ、リク才様？何なのですか？あの方は？私の気配に気付いてました？？」

いや、バレバレだよ、とは言わずに雪女の方を見る。

「うん。でもそれより……、華紅夜ちゃん……。」

雪女も言いたい事が分かったのか、真剣な顔をして頷いた。

「はい……。確かに——妖怪です。」

これが僕と華紅夜ちゃんとの出逢いだった。

肆 学校

「何で次の日から学校なんだか…。」

ボクは洋服を着て、ランドセルを背負いながら憂鬱気に呟いた。

浮世絵町に来てまだ一日。昨日一日を殆ど家の整理に使っていたから、浮世絵町を回ったりもしてない。だけど、月曜から行く事になった学校が次の日、つまり今日なので行くしかないのだ。

学校だけは昨日行っただので大丈夫だと思う。…方向音痴じゃないし。

ボクがこれから通うのは一番近い浮世絵小。家が隣同士だからまさかとは思ってたけど、本当に一緒とはね…。

そんな事を考えている間に、もう学校に着いてしまった。早めに出たからか、周りにはあまり人がいない。

ボクは深呼吸をすると、学校に足を踏み入れた。

????????

「あ！君が転校生？」

その声をかけられて振り向くと居たのは女の教師。担任の先生……だろうか。

「……はい。」

少し間を開けて頷くと、女は少し首を傾げたけどあんまり気にしなかったみたいで着いて来て、と言われる。

……大雑把なのかな……。

「来るの早いからびっくりしちゃった。三年生なのに偉いわね。」

「いえ。そんな事は……。習慣づいているだけです。」

これは謙遜とかじゃなくホント。京都では母様に合わせて起きてたからね。

「そーなんだ。お母さんが厳しいの？」

何だこの人…、随分事情にこだわってるな……。

「……ボクには両親がいません。既に故人です。」

少し突き放したような口調で言えば、先生もそ、そう…とそれ以来話す事はなくなった。

ボクは今窓の外を見ていた。

先刻から時間も経ったようで窓から見える校門には生徒が徐々に見え始めて居た。

あ、そう言えば言っただけ、今のボクの格好は、人間の姿太も位まである長い黒髪を後ろで一つの三つ編みにして、伊達眼鏡をかけている。銀髪じゃ目立つちゃうからね。目はどうにもならなかった。黒のカラコンを付けた。外国人って言っても有ったけど、それだとまた面倒だから。眼鏡は母様に渡されたから。何でだろ。

謎である。

見た事がない顔だから、ボクの方をチラチラ見る人がいる。

「…ふう…。」

こんなところにいても、何故か思い浮かぶのは京都での事ばかり。先程からボクに刺さる視線も京妖怪にも向けられた好奇の視線と同じだった。

……これは重症である。

いつまでも窓を見ていても仕方がない。時間もまだあるようなので、ボクは学校を回ろつかと適当に歩き出した。

理科室、図工室、音楽室… e t c

沢山の教室を回り、最終的に辿り着いたのは図書室。中を見ると、朝だからか誰もいない。ボクは中に入り、一周する。小学校と言う事もあって、あまりボクに合う本は見つからなかった。

ふと一冊の本の前で止まる。

『妖怪大百科』

…こんな本を読むやつが居るのか？

それは謎だが、ボクも一応妖怪。興味を持ったのでパラパラとめくる。適当なページを開けると、そのページの妖怪の名前は『化け猫・猫又』。京都では見れなかった妖怪だった。

この本では妖怪は絶対悪、みたいな事が書かれていた。陰陽師でも書いたのだろうか。

前世で知った母様を思い出してボクは思わず顔を顰めて本を棚に戻した。

????????

「——不知火 華紅夜です。今日から浮世絵小で勉強する事になりました。よろしく願います。」

自己紹介をしたあと、教室を見渡す。
ある一点で、ピタリと視線が止まってしまった。
ポカーン、としてボクを見つめる男子生徒。

—— リクオ君だ…

ボクが見つめている事に気付いたのか、慌てて顔を背けられた。
ボクも視線を外して先生を見た。

「先生、席は？」

「んー、そうね、奴良君の隣が空いてるし…。決定ね。」

それを聞いてスタスタと席に向かって歩く。その間も皆の視線はボクに向いていた。まあ気にしない。

ボクは黙って座ると、リクオ君の方をチラと見て言った。

「凄い偶然だね、リクオ君。」

「えっ？あ、うん、そうだね…。」

何故か気まずそうにするリクオ君。
ボクが妖怪だつてことに気付いたのかな。もしそうだったら、幼くとも奴良組若頭、ってことだね。

授業が始まって黒板を凝視するリク才君の横顔をボクは黙って見つめた。

伍 友達（前書き）

更新遅れてスイマセン！！！！！！

そしてお気に入り登録して下さい皆さん、有難うございます！

伍 友達

「ねーねー？ 不知火さんってどこから来たの？」

「可愛いよね、前の学校でモテたんじゃない？」

「彼氏いるの？」

他にも色々と華紅夜に質問してくるクラスメイト。

華紅夜は無表情の顔をその女子らに向けた。

眼鏡の奥の目はどことなく冷たい。

「君ら、しつこいんだけど。あんまりボクに構わないでくれるかな。」

そう言ってフラフラと教室から出て行ってしまった。
それを見た女子らは顔を赤くしたりと反応し、

「何あの子？」

「冷静ぶっちゃって？」

「無愛想よね。」

見ていたリクオは思った。

——第一印象最悪だよね……。

が、しかし。

やはり、そうは行かないのが華紅夜なのである。

「キヤー！？華紅夜様素敵！」

「不知火さんって可愛いよなあ……。」

体育の時間。

元々運動神経が良いようである華紅夜はバスケットボールでも大活躍だった。

反応を見て、怪訝な顔をしているが。

リクオは幼馴染の家長カナと言った。

「え？どうやったらこーなの？」

それは今でも謎である。

????????

「不知火さん？」

不意に呼ばれたボク。ボクは早く帰りたいだったので、少し不機嫌な顔で振り返った。

「家長さん？」

名前を言つとえっ？と言う顔になった。まさしくどうして名前知ってるの？と聞いているようだった。

「名札、ついたまんまだよ？」

ボクは自分の左胸をトントンと人差し指で叩いた。

すぐさま自分の左胸を見て確認する家長さん。気付いた途端、カアアア、と真っ赤になる。

そんな恥ずかしかったんだ。

「ははっ！キミ、面白いね。」

いきなり笑われた事に驚いたのか、家長さんはその場で固まる。

「改めて。ボクは不知火華紅夜。同い年だし、敬語はやめてよ。呼び捨てでいいし。」

ニコツと手を差し出すと、家長さんは慌てて掴んで言った。

「わ、私は家長カナ！よろしくね、華紅夜？あと、私もよ、呼び捨てでいいから…」

「うん。よろしく、カナ。」

そう言うと、カナは照れ臭そうに笑った。これなら、リクオ君が大切にするのも分かる気がする。可愛いし。にしてもこの子…。

「カナはリクオ君の事好きなの？」

「ふええっ？そ、そんな事ないよ？」

「でも授業中ずっと見てたでしょ、リクオ君のこと。」

ボクがクツリと笑うとカナはまた顔を真っ赤にした。

からかい甲斐がある。

????????

色々あつてカナと一緒に帰ることになったボクは間接的にリク才君とも変えることになる訳で。

「え？リク才君と華紅夜って知り合いだったの？」

「知り合い、と言うか昨日知り合ったんだけどね。」

苦笑しながら答えるリク才君。

「まあ、家が隣同士だったんだ。」

…リク才君、キミ、ボクの家には鞠をいれた事は言わないんだね。

特に気にする事でもないのでボクは成り行きを見つめる。

「ふうん…。リク才君、私負けないからね。」

「え？」

「うつん、何にもない。」

……カナ？こんな性格でしたっけ？

????????

「僕達はどこだから。じゃあね、カナちゃん。」

「じゃ。」

「うん、バイバイ！また明日ね。」

バスを下りたボクとリクオ君はまだバスに乗っているカナに手を振

った。

バスが動き、二人だけになる。リクオ君の行こっか、という言葉に歩き出すけど、やっぱり気まずい。前をボクが歩き少し後ろにリクオ君がいる。

その時、リクオ君が不意に口を開いた。

「…あの、さ。華紅夜ちゃんって僕の家のこと、知ってるんだよね？」

言うか言わまいか迷っていたのだろう。少し言いづらそうだった。ボクは振り返る。リクオ君は真剣だけど、困惑したような複雑な表情をしていた。

「…知ってるよ。理由はまだ言えない。その時が来たら、必ず教えるよ。」

リクオ君がぼかんとしていた。小学三年生には難しかったのかもしれない。

ボクはそれだけ言っと、逃げるように家に向かって走った。所詮言い逃げと言っやつだ。

待って！と言うリクオ君の声が聞こえたけど、構わず走った。

その時が来たら

それがいつになるかは分からない。でも、まだ言っ
てはいけない気がするんだ。

陸、始まる物語（前書き）

投稿遅れてすみません？

最近学校が忙しくて…

短いですが、原作に入ります。

一話ですが、長いので取り敢えず前置きです。

陸、始まる物語

「――妖怪って、いい奴らだよ!」

華紅夜はいきなり大きな声で目を覚ました。

転入してきて暫く経つが、華紅夜が寝ているのは珍しいことではないので、誰も気に留めない。

今は自由研究発表という学活の時間。

「（うるさいな……。）」

一度起きてしまえば、もう寝る気は起きない。

大きな欠伸を一つして、その声のする方を見た。

「おめー何だよ？清継くんの作った自由研究にケチつけよーってのか？」

喧嘩勃発である。

寝呆けた目でそれを眺めていると段々と話の内容も掴めてきた。

どうやら清継の自由研究にリクオの知っている妖怪を否定するような言葉を言われたらしい。

「（まあ実際見た訳でも無いんだから、信用する人なんていないよね。）」

かく言う自分も本当に見たもの以外信じない人間（…？）なので、皆が言うことがわからない訳でも無い。

「（でも——）」

華紅夜は溜息をついて立ち上がった。

「（妖怪を悪く言われて大人しく出来るほど、ボクも利口じゃないんだ）ねえ。」

ぬらりひよんのことを説明してリクオを馬鹿にしている清継に話しかける。

「ああ、不知火さん。君も妖怪なんて「正直言つて不愉快だよ。」

騒いでいた全員がポカンとして華紅夜の方を見た。

「キミらの言っていることも分かるよ。でもキミが言ってるのは、所詮人間側から見た妖怪だね。例えば動物から見れば人間だって妖怪と同じ立場なんじゃないの？生きるためには食べていかないといけない。それに、キミ…清継くんは創作だと思っっているらしいけど、そんな証拠は何処にもないでしょ？そう言つの、偏見って言っんだよ。分かるかな。」

華紅夜が喋り終わったあと周りは呆けていた。いつも無口な華紅夜が一続きに話したからだろう。

「華紅夜ちゃん…。」

リクオは目を輝かして感動している。そこで華紅夜はやっと目立ち過ぎた、と思いまとめる。

「ま、人によって考え方は其々だから、あんまり言わないでおくけど。リクオ君の考えに口出しする権利はキミ達にないよ。」

それだけ言つと華紅夜は荷物を詰め込んで今日はもう帰ります、と

先生に言つと教室を出た。

??????

家に帰つても特にやる事がないので、寝た華紅夜が目を覚ましたのは夕方だった。

突然強い妖気を感じたのだ。

百鬼夜行ができるほどの数。

華紅夜は起き上がるとニヤリと笑みを浮かべた。

ついに——物語は始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9614v/>

ハジマリは夜の舞台で

2012年1月1日15時47分発行